

# 子どもの親への愛着が子どもの自己決定力に与える影響

堀佳璃子\* 角田八千代\*\* 森永裕美子\*\*

**要旨** 本研究は、乳児期に形成される基本的信頼感によって成す親への愛着が、子のアイデンティティ形成に重要な自己決定力の獲得への影響を明らかにすることを目的とした。A大学の学生を対象に無記名自記式質問紙調査を実施し、244名（有効回答率94.2%）を分析対象とした。親への愛着は愛着尺度、自己決定力は心理的自立尺度を用い、因子分析を実施し愛着2因子と心理的自立6因子を抽出後、偏相関・単回帰分析を用いて因子間の関連性を分析した。

結果、愛着尺度下位因子の「愛着不安」は、心理的自立尺度および下位因子である「自己統制・客観視」、「価値判断・実行」、「適切な対人関係」、「現在把握・将来志向」を有意に抑制（ $p < .01$ ）していた。乳幼児期の親への愛着形成は、青年期の自己決定に大きく影響しており、看護職として親子の愛着形成のために予防的視点で早期介入し育児支援を行うことが重要である可能性が示唆された。

**キーワード：**親への愛着、自己決定力、心理的自立、アイデンティティ、親子関係

## 1. 諸言

平成30年に民法の成年年齢を20歳から18歳に引き下げることを内容とする民法の一部を改正する法律が成立した。成年年齢とは父母の親権に服さず、一人で有効な契約ができるという意味を持ち、民法の一部が改正されたことにより18～19歳の若者にも国民投票の投票権や公職選挙法の選挙権が認められ、国政上の重要な判断が求められるようになった（法務省，2022）。このような社会情勢から18～19歳の若者が自らの判断によって人生を選べる環境整備や、積極的な社会参加を促していく必要性があると考えられる。

一方、13歳から29歳を対象とした子ども・若者の意識に関する調査（内閣府，2019）では、【自分の考えをはっきり相手に伝えることができるか】という調査に対し、「当てはまらない・どちらかといえば当てはまらない」と答えた者が50.9%であった。自分の判断にもとづいて主体的に実行する「価値判断・実行」は自立の一側面である（高坂，2006）が、これらは「自分らしさ」「自分とはこうである」というアイデンティティの獲得と深く関連していると考えられる。アイデンティティの獲得は青

年期の発達課題であるだけでなく、それまでの各発達段階における発達課題を達成したのちに獲得しうるものであり、永続するアイデンティティは乳児期に親に愛情を受け、世話をされることで形成される基本的信頼感がなくてはそもそも存在することができないと言われてきた（Erikson，1959）。

また、Bowlby（1973）は乳児期に形成される基本的信頼感とは親への愛着行動に示され、愛着を「人が生後数か月の間に特定の人（母親や父親）との間に結ぶ情愛的な絆」と定義し、愛着は乳幼児期を過ぎると消え去るのではなく、青年期、成人期以降も持続し、人生において重要な役割を果たすといった特定の対象に対する特別な情緒的結びつきのことであるとした。

乳児期に見せる子から親への愛着は、その後の人生に大きく影響し、特に青年期では、親から分離して独立した個人になる時期であり、青年期の親子関係とアイデンティティの形成には何らかの関係があると考えられる。青年期の親子関係の中でも「情緒的結びつき」である愛着形成が、娘の「アイデンティティ形成」と「精神的健康」に与える影響について調査した赤木（2018）は、母親に対して押し付け

\* 岡山大学病院

\*\* 岡山県立大学保健福祉学部看護学科

や劣等感といったネガティブな感情を持たない安定した愛着のある母娘関係がアイデンティティの形成に重要であると述べている。「母娘関係」において安定した親への愛着とアイデンティティの形成との関連は明らかになっているが青年期における男女を対象にした先行研究はない。また、青年期における最も大きな危機は職業選択における危機であり、自分で職業を選択する際は、「自分が何をしたいのか」「自分は何者なのか」というアイデンティティについての問いに自己決定を繰り返していく。その自己決定を模索していく途上、「これまでのアイデンティティのすべての要素を最終的に集合し、そして基準から外れたものを放棄する作業がある(Erikson, 1959)」とされており、青年期においてアイデンティティ形成には自己決定力が大きく影響している。

そこで、本研究は、幼少期からの愛着形成の在り方への支援の示唆を得るため、乳児期から継続して影響し続ける「親への愛着」がアイデンティティ形成に重要な「自己決定力」の獲得にどのように影響するのかを明らかにすることを目的とする。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 調査対象

青年期にあたる A 大学の大学生 259 名に無記名自記式質問紙を配布した。回収された 259 名のうち質問紙に記入漏れのあった 15 名を除く 244 名（有効回答率 94.2%）を分析対象とした。

### 2. 調査方法と期間

調査期間は令和 4 年 10 月～11 月であった。調査は大学で講義に出席している大学生に質問紙を配布し、文書にて研究の趣旨を説明し、同意が得られた人に回答を求め、回収ボックスで回収した。

### 3. 調査内容

調査項目は年齢、性別の基本属性、【親への愛着尺度】、【心理的自立尺度】で構成した。

- 1) 親への愛着尺度 丹羽（2005）による【親への愛着尺度】を用いた。「愛着不安」8 項目、「愛着回避」9 項目の計 17 項目からなる。回答は「そう思わない」、「あまりそう思わない」、「ややそう思う」、「そう思う」の 4 件法で求めた。
- 2) 心理的自立尺度 自己決定力を測定する尺度と

して高坂、戸田（2006）による【心理的自立尺度】を用いた。「価値判断・実行」7 項目、「自己統制・客観視」7 項目、「現在把握・将来志向」5 項目、「適切な対人関係」5 項目、「社会的知識・視野」5 項目の計 29 項目からなる。回答は、親への愛着尺度同様 4 件法で求めた。

## 4. 分析方法

【親への愛着尺度】17 項目及び【心理的自立尺度】29 項目は、信頼性・妥当性の検証がなされたものであるが本研究においてもそれぞれ因子分析、バリマックス回転及び内的整合性の確認を行った後、両者の関係性について偏相関分析・単回帰分析を用いた。親への愛着尺度統計処理には SPSS.Ver.29 を使用した。

## 5. 倫理的配慮

研究の目的・方法、質問項目等について口頭と書面で説明したうえで自由回答とし、研究協力の同意が得られた場合は質問紙の同意欄へのチェックおよび質問紙の返送をもって同意を得たとみなした。また、質問紙は無記名とし、得られた内容は本研究発表以外には使用しないほか、個人が特定されるような情報が研究担当者以外に知られることがないように厳重に管理した。本研究は岡山県大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（22-29）。

## Ⅲ. 結果

### 1. 親への愛着尺度の因子構造

【親への愛着尺度】について因子分析（主因子法、バリマックス回転）、 $\alpha$  係数を算出したところ先行研究と同様の因子結果（Table1）であったため、下位尺度は「愛着不安」8 項目、第 2 因子を「愛着回避」9 項目とし以降の分析に用いた。

### 2. 心理的自立尺度の因子構造

【心理的自立尺度】項目について、【親への愛着尺度】と同様の手順で因子分析（バリマックス回転）を行い、固有値や結果の解釈可能性から 6 因子構造が適切であると判断した。また 1 項目が第 1 因子に対し、.40 以下の負荷を示していたため削除し、再度因子分析を行った結果、Table2 に示す 28 項目が残された。

第 1 因子から第 4 因子については高坂・戸田

(2006) で示された因子構造と同様の結果となっていたため、第1因子を「価値判断・実行」、第2因子を「自己統制・客観視」、第3因子を「現在把握・将来志向」、第4因子を「適切な対人関係」とした。第5因子は“世間の情勢に詳しい”、“社会的に広い視野をもっている”という社会的な知識や視野を表していると解釈されるため、高坂・戸田(2006)と同様に「社会的知識・視野」と命名した。第6因子では、高坂・戸田(2006)での【心理的自立尺度】で示された第5因子の「社会的知識・視野」中の“自分も社会の一員だという認識がある”、“社会生活における自分の役割がわかっている”という2項目が、新たな第6因項目となり、社会における自分の役割が理解できることを表していると解釈されることから、「社会的役割認識」と命名した。

また、各因子の内的整合性を確認するため、 $\alpha$ 係数を算出した結果(Table2)、.806～.895といずれにおいても十分な信頼性が確認されたことから、各因子の項目の回答得点を加算した下位尺度得点を以降の分析に用いた。さらに、全28項目で $\alpha$ 係数を算出した結果、.922と十分な信頼性が確認されたため28項目の回答得点を加算し、これを心理的自立得点とした。

### 3. 【親への愛着尺度】と【心理的自立尺度】の偏相関分析

【親への愛着尺度】と【心理的自立尺度】との関連を調べるために相関を算出した(Table3)。ただし、Brennan(1998)によって行われた愛着尺度の分析結果より、愛着対象に関わらず愛着尺度は回避と不安で構成されていることが明らかとなっており、このことから丹羽(2005)は「愛着不安」と「愛着回避」はある程度の独立性を持った2側面の親への愛着尺度として捉えている。本調査では「愛着不安」と「愛着回避」との相関係数が $r=.407$ であり、中程度の相関がみられたため、【心理的自立尺度】との偏相関係数を算出した。偏相関係数を求めるにあたって、「愛着不安」については「愛着回避」の、「愛着回避」については「愛着不安」の影響を除いた。

その結果、「愛着不安」では、【心理的自立尺度】の6下位因子のうちの「価値判断・実行」( $r=-.262$ ,  $p<.001$ )と「自己統制・客観視」( $r=-.299$ ,  $p<.001$ )、「現在把握・将来志向」( $r=-.199$ ,  $p<.05$ )、「適切な対人関係」( $r=-.259$ ,  $p<.001$ )の4因子に有意な偏相関がみられ、「心理的自立」( $r=-.306$ ,  $p<.001$ )との間には負の偏相関がみられた。「愛着回避」では【心理的自立尺度】の6因子において「現在把握・将来志向」( $r=.136$ ,  $p<.05$ )と「適切な

Table1 親への愛着尺度の因子分析(バリマックス回転後)

項目	F1	F2
<b>愛着不安</b>		
④私が親の近くにいたがる時、親はうっとうしく思っているのではないかと心配になる	<b>.821</b>	.088
③親に見放されるのではないかと不安になる	<b>.812</b>	.212
②親は私と一緒にいたくないのではないかと不安になる	<b>.791</b>	.091
⑦親は私にあまり関心がないのではないかと心配になる	<b>.755</b>	.250
⑤私が親に頼ることを、親は迷惑に思っているのではないかと心配になる	<b>.701</b>	.118
⑧親は困った時に私を助けてくれるか不安に思う	<b>.666</b>	.404
⑥親は本当は私を理解してくれていないのではないかと不安になる	<b>.599</b>	.350
①必要な時に親は私の近くにいてくれないのではないかと不安に思う	<b>.401</b>	-.045
<b>愛着回避</b>		
⑩親に助言や助けを求めない	.286	<b>.769</b>
*⑮気軽に親に頼ることができる	.306	<b>.760</b>
*⑯親に個人的な感情や考えを打ち明ける	.125	<b>.742</b>
⑨困ったことがあっても親に相談したくない	.339	<b>.689</b>
*⑰親と一緒にいると安心する	.214	<b>.689</b>
⑪親に自分のことを必要以上に話すのを好まない	.223	<b>.683</b>
*⑭親がいなくなった時のことを考えると不安になる	-.178	<b>.534</b>
⑫親に助けてもらわず自分でやることを好む	.195	<b>.484</b>
*⑬私は親から愛されているという安心感を必要としている	-.254	<b>.435</b>
回転後の負荷量平方和	4.899	4.8
$\alpha$ 係数	.873	.867

\*逆転項目。

Table2 心理的自立尺度因子分析結果（バリマックス回転後）

項目	F1	F4	F3	F2	F5	F6
<b>価値判断・実行</b>						
②自分一人で物事を決めることができる（価値）	<b>.823</b>	.085	.103	.171	.057	.067
④自分のことは自分で判断する（価値）	<b>.799</b>	.131	.152	.100	.059	.034
③周りの人に流されずに行動したり考えたりすることができる（行動）	<b>.790</b>	.154	.138	.081	.143	.032
①自分が正しいと思った道を突き進むことができる（行動）	<b>.730</b>	.071	.186	.165	.126	.091
⑤自分の判断を信じるることができる（価値）	<b>.655</b>	.322	.121	.078	.124	.034
⑦意見がはっきりと言える（行動）	<b>.527</b>	.080	.165	.196	.186	-.056
<b>自己統制・客観視</b>						
⑧感情のコントロールができる（情緒）	.181	<b>.637</b>	-.011	.167	-.025	.199
⑨一時の感情に左右されない（情緒）	.256	<b>.630</b>	-.023	.092	.100	.291
⑫常に落ち着いている（情緒）	-.020	<b>.595</b>	.250	.130	.233	-.231
⑪悲しみ、怒りなどの感情を自分一人で落ち着かせることができる（情緒）	.129	<b>.573</b>	.156	.062	.033	-.078
*⑩つい感情に任せて行動してしまう（情緒）	.057	<b>.559</b>	-.065	.078	-.007	.103
⑬物事を客観的に見ることができる（認知）	.130	<b>.534</b>	.332	.218	.278	-.046
⑭自分を冷静に見つめ、理解している（認知）	.230	<b>.415</b>	.384	.206	.189	-.133
<b>現在把握・将来志向</b>						
⑰将来のことをよく考えている（価値）	.111	.017	<b>.799</b>	.081	.203	.074
⑮自分の目標がはっきりしている（価値）	.203	-.022	<b>.711</b>	.155	.193	.055
⑯将来のために努力することができる（行動）	.192	.113	<b>.708</b>	.163	.149	.209
⑰自分の置かれている立場をわかっている（認知）	.222	.276	<b>.567</b>	.252	-.071	.112
⑱自分の短所・長所を知っている（認知）	.169	.109	<b>.516</b>	.313	.129	.060
<b>適切な対人関係</b>						
⑫周囲の人と協調することができる（情緒）	.085	.121	.129	<b>.873</b>	.048	.058
⑭相手の気持ちに合わせて適切に接することができる（情緒）	.120	.162	.179	<b>.806</b>	.154	.073
⑬他人の気持ちを思いやること（情緒）	.098	.163	.125	<b>.757</b>	.027	.049
⑯友好関係をうまく築くことができる（情緒）	.246	.055	.197	<b>.686</b>	.107	.094
⑭状況に合わせた行動ができる（行動）	.263	.228	.221	<b>.593</b>	.101	.100
<b>社会的知識・視野</b>						
⑫色々なことをよく知っている（認知）	.161	.034	.157	.082	<b>.907</b>	.032
⑰社会的に広い視野をもっている（認知）	.197	.138	.265	.190	<b>.715</b>	.184
⑮世間の情勢に詳しい（認知）	.176	.132	.133	.060	<b>.680</b>	.085
<b>社会的役割認識</b>						
⑮自分も社会の一員だという認識がある（認知）	.057	.197	.368	.219	.194	<b>.669</b>
⑰社会生活における自分の役割がわかっている（認知）	.102	.041	.377	.266	.322	<b>.522</b>
回転後の負荷量平方和	3.807	2.72	3.253	3.461	2.379	1.093
$\alpha$ 係数	.892	.895	.853	.808	.863	.806

\*逆転項目。

Table3 親への愛着尺度と心理的自立尺度の偏愛関係係数

	価値判断・ 実行	自己統制・ 客観視	現在把握・ 将来志向	適切な 対人関係	社会的知識・ 視野	社会的役割 認識	心理的自立
愛着不安	-.262**	-.299**	-.199**	-.259**	-.068	-.094	-.306**
愛着回避	.086	.121	-.136*	-.210*	.015	-.107	-.032

\* $p < .05$ , \*\* $p < .001$



Table4 心理的自立尺度の回帰分析結果

		価値判断・ 実行	自己統制・ 客観視	現在把握・ 将来志向	適切な 対人関係	社会的 知識・視野	社会的役割 認識	心理的自立
愛着不安	$\beta$	-.250**	-.275**	-.271**	-.356**	-.068	-.149*	-.343**
	$R^2$	.062	.072	.070	.123	.001	.018	.114
愛着回避	$\beta$			-.230**	-.324**			
	$R^2$			.053	.101			

\* $P < .05$  \*\* $P < .001$

対人関係」( $r = -.210$ ,  $p < .05$ ) の2因子に有意な負の偏相関がみられた。

#### 4. 【親への愛着尺度】と【心理的自立尺度】の回帰分析

互いに影響している因子において、因果関係を求めるために、【親への愛着尺度】の2下位尺度得点(「愛着不安」「愛着回避」)を説明変数に、偏相関分析結果から有意な偏相関がみられた【心理的自立尺度】の因子下位尺度得点、すなわち「愛着不安」は有意な偏相関があった4因子、「愛着回避」は、有意な偏相関があった2因子を従属変数とした単回帰分析を行った。

その結果、「愛着不安」は「価値判断・実行」( $\beta = -.250$ ,  $p < .001$ )、「自己統制・客観視」( $\beta = -.275$ ,  $p < .001$ )、「現在把握・将来志向」( $\beta = -.271$ ,  $p < .001$ )、「適切な対人関係」( $\beta = -.356$ ,  $p < .001$ )の4因子と「心理的自立」( $\beta = -.343$ ,  $p < .001$ )を抑制する方向で影響しており、「愛着回避」は「現在把握・将来志向」( $\beta = -.230$ ,  $p < .001$ )と「適切な対人関係」( $\beta = -.324$ ,  $p < .001$ )の2因子を抑制する方向で影響していることが分かった (Table4)。

#### IV. 考察

本研究では、乳児期から継続して影響し続ける「親への愛着」が青年期におけるアイデンティティの形成に重要な「自己決定力」の獲得に関連する「心理的自立」にどのように影響するのかを明らかにすることを目的とし、関連性を検討した。「愛着不安」は「心理的自立」とその下位尺度である「価値判断・実行」、「自己統制・客観視」、「現在把握・将来志向」、「適切な対人関係」の4因子と負の相関が示された。

「愛着不安」とは、必要とするときに親から助けや受容がえられるかについて不安をもつことであ

り、「愛着不安」が強い人にとって親からの「心理的自立」は、親子の乖離への不安感を増強させる原因となり、親からの自立を抑制する要因になると考えられる。また、親への「愛着不安」が強い人は一番近い存在であるはずの親から助けを得られないと感じているため、他者からの評価や反応が得られるとは考えにくく、自分の価値観に自信が持てないために自分の価値観に基づいて判断し行動ができる「価値判断・実行」(高坂・戸田, 2006)に負の影響を与えると考えられる。

次に、「自己統制・客観視」とは自分の感情をコントロールし、自分や外的事象を客観的に見ることができると(高坂・戸田, 2006)であるが、自己統制力の獲得は幼少期からの親の養育態度と関連している。親が子に対して温かく受容的であった場合は、自己統制力が育つが、親の養育態度が冷たく拒否的であった場合は自己統制力が育たず、幼少期の子はフラストレーションを生みやすく攻撃的になる(森下, 2003)。

親の養育態度が冷たく拒否的であるという非受容的な養育態度は愛着不安を強め、幼少期から自己統制力が育たず青年期においても、自己統制・客観視が難しいと考える。一方で「自己統制・客観視」は「現在把握・将来志向」とも関連しているとも考えられる。「自己統制・客観視」は、自身を客観的に見ることにより現在の自分の状態を把握(現在把握)し困難感や疲労があったとしても、現在の感情よりもその先の自分の将来にとって必要なこと(将来志向)であるならば努力を維持することができるからである。前述により「愛着不安」は「自己統制力」を抑制する方向で働くが、同時に現在の自分の状態を理解し、それをもとに将来を考え努力できる能力である「現在把握・将来志向」(高坂・戸田, 2006)も抑制すると考えられる。

また、子が親からの期待に応えたいと思っていれ

ば親からの期待は子の将来への意欲の上昇につながり、子の「期待に応えたい」という意識は良好な親子関係によって高まる(武田, 2011)ことから、「現在把握・将来志向」は愛着不安とは対極の良好な親子関係により促進されると考えられる。「適切な対人関係」は、周囲の人と協調し他者と適切に関わる能力である(高坂・戸田, 2006)が、「愛着不安」は家族以外の他者との関りとも関連しているということが明らかになった。

Erikson (1959)によれば、乳児期の発達課題の「基本的信頼感対不信任」における基本的信頼感とは、乳児期に子が母親(父親)との一体感や母親への信頼感を経験して形成されるもので、他者からありのままを受け入れてもらえる安心感と、「自分は他人に受け入れてもらえる価値のある人間だ」と思える自分への信頼感のことであり、人に対して信頼感や安心感を持てるかどうか大きく影響し、人間関係を築くための基礎になるものである。そのため、親子関係に問題のある「愛着不安」が強い人ほど、幼少期からの親への不信任は強く、適切な対人関係を築くための能力の発達が未熟であると考えられる。

「愛着回避」は「現在把握・将来志向」、「適切な対人関係」の2因子と負の相関が示された。愛着が回避的な人は、助けを必要とするときでも親に頼ることや近接することを回避し、ストレス状況において親に接近や助力を求めても拒否されることから起こる葛藤をなくそうと、接近や助力を回避するために、ストレスから注意をそらして感じられにくくする(丹羽, 2005)。そのため、現状を的確に把握し将来の目標に向かって努力することが難しいと考えられる。そして親への愛着は対人関係不安や孤独感を低減する(丹羽, 2005)が、親との良好な関係が形成されにくい愛着回避的な人は、適切な対人関係をもちにくいと考えられる。

一方で、「社会的知識・視野」、「社会的役割認識」という社会的能力は、「愛着不安」・「愛着回避」ともに相関関係がみられなかった。「社会的知識・視野」の“世間の情勢に詳しい”や、「社会的役割認識」の“自分も社会の一員だという認識がある”といった社会的能力は、親との関係が関連しているというより、青年期以降の社会経験から培われていくのではないかと考えられる。澁谷(2019)によれば、大学生がインターンシップ経験とアルバイト経験によ

り、働くことに対する心構えや前向きな態度を形成でき、自分自身の社会での役割を見出すきっかけとなることや、社会人基礎力の向上の必要性から社会情勢について興味を持ち始めることが報告されており、社会的能力は親子関係だけでなく、青年期以降の自身の社会経験にも大きな影響を受け培われていく可能性がある。

Deci & Ryan (1985)によると「有能さ:自分の能力とその証明に対する欲求」、「関係性:周囲との関係に対する欲求」、「自律性:自己の行動を自分自身で決めることに対する欲求」が自己決定を促進させる3つの基本的欲求であるが、その3つの基本的欲求と、本研究で明らかになった親への愛着不安に負の影響を与える【心理的自立尺度】の4因子は類似している。つまり、親への愛着に不安感を持っている人は、基本的欲求が満たされていないために、「自己決定力」形成が不十分であると考えられる。また、愛着が回避的な人も、現在把握といった自己の認知ができておらず、適切な対人関係の構築が困難であることから、「有能さ」「関係性」という自己決定の基本的欲求が満たされず、親からの自立欲求は強いが、自己決定力は形成されにくいと考える。

また、青年期には、児童期まで、親や教師といった重要な他者の価値基準を通して構築してきた同一化群を、自らの価値基準で再度構築していく必要に迫られる(溝上, 2007)が、親への愛着が適切でない場合、それまでの親から受けた愛情や親の価値基準が大きく影響し、親から自立したいと望んでいるかどうかに関わらず、自己決定プロセスに何らかの障害があり、青年期の重要な発達課題である「アイデンティティと同一性の拡散」を適切に乗り越えられない可能性がある(Erikson, 1959)。

以上のことにより、子の自己決定力や自己価値の認知など、適切なアイデンティティの形成には、乳幼児期からの適切な親子関係が重要であり、親は子に対して温かく、受容的な態度で接し、子が安心して親に助けを求められるような環境を作る必要性があると考えられる。

そのため、親子へ早期に関わることでできる看護職としては乳幼児期における親子の基本的信頼感が適切に築かれるよう、乳児と保護者との関係性に注意しながら、親との愛着関係が不安定な子に対して、看護職等による信頼できる人間関係の構築を目指した関わりを行う。それが親にとってもまた、受

容的態度に関わることの理解を深める機会となり、愛着形成に寄与できると考えられる。しかしながら、本研究は、A 大学のみの学生を対象にした調査であり、地域・対象が限定されているため、今後は対象を複数大学に拡大すること、経年的に分析を試みるものが課題である。

## V. 結論

「親への愛着」が心理的自立尺度で測定した「自己決定力」にどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的とし、関連性を検討した。結果、子が示す親への愛着は、青年期の心理的自立に関係していた。「愛着不安」は「心理的自立」とその下位尺度である「価値判断・実行」、「自己統制・客観視」、「現在把握・将来志向」、「適切な対人関係」の4因子と、「愛着回避」は「現在把握・将来志向」、「適切な対人関係」の2因子と負の相関が明らかになった。

本研究より、乳幼児期からの親子関係を示す親への愛着形成が適切でない場合、自己決定の側面に負の影響を及ぼし、自立していくための準備期である青年期において重要なアイデンティティの形成にも影響する可能性が示唆された。

## 付記

本調査にご協力いただきました皆様に深謝申し上げます。

## 文献

- 赤木真弓 (2018) 母娘関係が娘のアイデンティティ形成と精神的健康に与える影響：母娘関係尺度の作成を通して、立教大学発達心理学研究, 29 (3), 114-124.
- Bowlby, J. (1969). 黒田実郎他訳 (1991) 母子関係の理論Ⅱ：【新版】分離不安, 岩崎学術出版社.
- Brennan, K.A. (1998). Attachment-style differences in attitudes toward and reactions to feedback from romantic partners: An exploration of the relational bases of self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin.*, 24, 699-714.
- Deci, E.L.&Ryan, R.M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York, Plenum Press.
- Erikson.E.H. (1959) 西平直他訳 (2011). アイデン

ティティとライフサイクル, 誠信書房.

法務省. 民法の一部を改正する法律 (成年年齢関係について).

[https://www.moj.go.jp/MINJI/minji07\\_00218.html](https://www.moj.go.jp/MINJI/minji07_00218.html) (2022 年 12 月 11 日アクセス)

溝上慎一 (2007) ポストモダン社会におけるアイデンティティの二重形成プロセスと心理学者の仕事, *心理科学*, 28 (1), 54-71.

森下正康 (2003) 幼児の自己統制機能の発達研究, *和歌山大学教育学部境域実践総合センター紀要*, 13, 47-54

内閣府. 子ども・若者の意識に関する調査 (令和元年度).

<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r01/pdf-index.html> (2022 年 12 月 11 日アクセス)

丹羽智美 (2005) 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程, *パーソナリティ研究*, 12 (2), 156-169.

澁谷由紀 (2019) 大学生がインターンシップ経験とアルバイト経験から得た学びについての一考察, *キャリア教育研究*, 37, 55-66.

武田真梨子 (2011) 親の期待と子どもの受け止め方—子どもの将来への意欲と自己否定感に与える影響—, *研究所報*, 60, 30-39.

高坂康雄, 戸田弘二 (2006) 青年期における心理的自立 (Ⅱ): 心理的自立尺度の作成, *北海道教育大学紀要 (教育科学編)*, 56 (2), 17-30.

## **Influence of Children's Attachment to Their Parents on Children's Ability to Self-determine**

**YOSHIKO HORI\*, YACHIYO SUMIDA\*\*, YUIKO MORINAGA\*\***

*\*Okayama University Hospital*

*\*\*Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University*

**Abstract :** This study aimed to clarify the influence on attachment to parents, which are indicators of basic trust formed in infancy, and on the acquisition of self-determination skills, which are important for the formation of attachment in children. An anonymous self-administered questionnaire survey was conducted among students from University A, and 244 students (valid response rate: 94.2%) were analyzed. Factor analysis was performed using the Attachment Scale for attachment to parents and the Psychological Jiritsu Scale for self-determination, and after extracting two attachment factors and six psychological jiritsu factors, the relationship between factors was analyzed using partial correlation and simple regression analysis. As a result, "attachment anxiety," a subfactor of the attachment scale, significantly suppressed the psychological jiritsu scale and the lower factors "self-discipline and objectivity," "value judgment and execution," "appropriate interpersonal relationships," and "grasp the present and future orientation" ( $p<.01$ ). The formation of attachment to parents in infancy greatly influences self-determination in adolescents, and it is suggested that it may be important for nurses to intervene early and provide childcare support from a preventive perspective for the formation of attachment between parents and children.

**Keywords :** Attachment to parents, Self-determination, Psychological Independence, Identity, Adolescence